鄭清文の作品における少年表象と幸佳慧の児童文学
―台湾郷土文学における「私たち」の子供時代―

松崎寛子

（日本大学文理学部特別研究員）

台湾における児童文学は、戦後の国語推進運動とも相まって、子供達に「中国人」としての国家アイデンティティを確立させるために重要な役割を担ってきた。しかし、1980 年前後の民主化運動、郷土運動にともない、台湾の子供達のための台湾を語る児童文学を創作しようとする作家達が登場するようになった。代表的台湾郷土作家の一人である鄭清文は 1932 年日本統治期の台湾に生まれ、中学初期まで日本語で教育を受け、戦後中国語を取得した。鄭は日本の敗戦、白色テロ、民主化と激動する台湾の歴史を体験するなかで、児童文学創作を通して自らの台湾アイデンティティの模索をしていった。鄭清文は児童文学創作を始める前より、自身の子供時代の記憶と日本統治時代の記憶を重ねた作品を多く執筆しており、「私が書く文学は『私たち台湾の物語』でありたい」と語っている。児童文学を創作する際も「台湾の子供達のために台湾を舞台にした台湾の物語を書きたい」と述べている。鄭は自身の子供時代の記憶を「私たちの物語」として描き、児童文学においても「私たちの物語」を創作しようとした。一方、1973 年に生まれた幸佳慧は、ちょうど台湾の民主化と共に育ち、台湾が民主化を達成し、民主国家として成熟していく中で児童文学作品の創作をしていった作家である。幸佳慧は白色テロなどの台湾の政治問題や、環境問題、児童性虐待、原住民の子供の人権問題等をテーマに児童文学作品を創作してきた。台湾の民主化と共に生まれ育った幸佳慧は、上の世代の個人の記憶を児童文学でどのように「私たちの物語」に体現することを試みたのであろうか。また、原住民の人権問題など「私自身の物語」ではないテーマをどのように「私たちの物語」として描きだしたのか。本論文では鄭清文と幸佳慧の文学作品を分析しながら台湾郷土文学における子供時代の表象及び「私たちの物語」としての児童文学について論じたい。